

# 青年の甘えと社会的適応に関する調査研究Ⅱ

## “Amae” and Social Adaptation of the Young Ⅱ

篠原しのぶ・原崎聖子

キーワード：甘え、社会的適応、人間関係、達成行動、セルフコントロール

Key word: “Aamae”, Social-adaptation, Human-relations Achievement-behavior, Self-control

### はじめに

我々が1996年より「甘え」について研究を進めるにあたり考え続けていたことは、第1に、日本国内における『甘え』或いは『甘える』という現象の中に、肯定的な要素を見つけ出したいということであり、第2に、そこで見出されたさまざまな要素を利用することによって、自己分析や人間関係の改善に役立てたいという点であった。

そこで、土居健郎氏が「甘えの構造」を発表して以来「甘え」に対する概念化が様々な角度から語られている中で、あえて概念を作らずに、甘えから連想される現象或いは甘えに関する文献の中に登場することばを中心にして質問紙を作成し、帰納的に甘えについて考えていくことにした。

その方法としては、前回までの論文にも一部報告したが①「甘え」或いは「甘える」という言葉を聞いて思い起こす行動や現象を、心理学関係の講義を受講する男女大学生に、思いつくままできるだけ多く記入させる。②その中から甘えを明らかに捉えていると思われ、且つ、質問項目となり得る言葉を選択する。③性格ではなく、行動を表しているか否かを吟味する」という段階を踏んで質問紙を90問作成し、日本の大学生・高校生、中国の大学生、アメリカの大学生らを対象に調査を実施し、因子分析を行った。

しかし、これまで研究をすすめてくる中で、我々が作成した質問項目が『本当に甘えを捉えているのか』という疑問が確認されていないことに気づいたし、幾度かは他者からも同様の疑問が投げかけられたことから、この点を検討する必要性が出てきた。

さらに、これまでに抽出された甘えの因子を、他の社会的適応や性格検査等と絡ませて分析した結果の中には当初、我々が考えていたような肯定的な相関関係がはっきりした形ではほとんど見出されなかったことから、抽出された因子の根底に、或いは背景に存在するものについて考える必要性もでてきた。

そこで今回の調査においては、上記のような点に重点を置き考察をすすめていくこととする。

### 第1研究 甘えをどの程度捉えているか

まず、我々が作成した質問項目が甘えをどの程度捉えているかについて調査を実施した。

#### 〔調査手続き〕

1. 調査対象者  
福岡市内 女子 成人（平均年齢31.7歳） 97名  
福岡市内 女子大学生 108名
2. 調査期間  
成人 平成11年1月  
学生 平成11年6月
3. 調査内容  
甘え行動に関する項目（5段階評定） 75問

#### 〔結果〕

今回は、成人女性並びに大学生女子を対象に、これまでの研究に使用してきた質問項目の中の75問それぞれに対して、どの程度「甘え」だと思うかを、5—非常に思う、から、1—全く思わないまでの5段階で評定してもらった。表1は成人女性の結果を評定値の高い順に示したものである。

表1を見ると、「自立していないと思う」から「認めてもらいたい」までの75問中、63問が評定値3.0以上になっている。これらの項目は評定者にとって明らかに「甘え」であると捉えられていると考えられることから、われわれのこれまでの研究において「甘えの項目」として取り上げたことに何ら支障はないものと考えることができる。

そこで今回評定値が3.0以下であった残りの12項目に着目してみる。これらは、「気兼ねする」「周りによく気をつかう」「遠慮深い」「控えめである」に代表されるような、一見して、甘えというよりは、慎み深くて優しく、気遣いの行き届いたおとなしい人物の行動を想像させるものである。いわゆる日本女性の鏡として代表されるような類のものであると言えよう。このような特性は、果たして「甘え」とは関連性がないと言えるであろうか。

われわれはこれまで、研究を進めていく際に、使用した75の甘え項目を因子分析するという方法を続けてきたが、その中に必ず見いだされる因子のひとつに「引っ込み思案の甘え」因子がある。この因子の中には、全5項

表1. 各項目を「甘え」だと思ふ程度の平均と標準偏差

No	甘えの項目	平均(S.D)	No	甘えの項目	平均(S.D)
1	自立していないと思う	3.91 (1.07)	39	人の後からついていく	3.28 (1.00)
2	許されると思う	3.87 (0.96)	40	長いものにまかれる	3.27 (0.83)
3	思い通りにならないと思う	3.84 (1.08)	41	小異をすて大同につく	3.25 (0.90)
4	すぐ人に頼む	3.81 (1.04)	42	わかってほしいと思う	3.24 (1.03)
5	義務をはたさない	3.80 (1.06)	43	ひねくれている	3.21 (1.19)
6	依存心が強い	3.80 (0.89)	44	受け入れてほしい	3.21 (1.02)
7	責任転嫁をする	3.75 (1.11)	45	やけくそになる	3.20 (1.01)
8	怠け者である	3.69 (1.01)	46	協調は嫌いだ	3.20 (1.17)
9	周囲にやつあたりする	3.68 (1.21)	47	人に取り入る	3.19 (1.02)
10	困難をさける	3.65 (1.93)	48	付和雷同的である	3.17 (0.76)
11	努力しようとしめない	3.65 (1.18)	49	人を恨みに思う	3.16 (1.02)
12	依存心が強い	3.65 (0.96)	50	ほめられたいと思う	3.16 (1.06)
13	責任感が無い	3.64 (1.29)	51	以心伝心をはかる	3.15 (1.02)
14	責任ある仕事はしない	3.64 (1.13)	52	妥協することが多い	3.14 (1.01)
15	過失をうやむやにする	3.64 (1.14)	53	負け犬になる	3.13 (1.10)
16	人に物をねだる	3.64 (1.25)	54	八方美人である	3.12 (1.16)
17	甘さがある	3.62 (0.92)	55	人に従う	3.11 (0.94)
18	弱い者に腹いせする	3.57 (1.44)	56	反抗する	3.08 (0.94)
19	だらしない	3.56 (0.99)	57	人の顔色をうかがう	3.06 (0.98)
20	すぐ不機嫌になる	3.55 (1.11)	58	従順である	3.05 (0.95)
21	すねることがある	3.53 (0.95)	59	許せないと思う事がある	3.05 (1.08)
22	ふてくされる	3.53 (0.93)	60	未熟だと感じる	3.03 (1.14)
23	よく腹をたてる	3.52 (1.03)	61	人の陰にかくれる	3.02 (1.11)
24	自立していない	3.51 (0.99)	62	お世辞を言う	3.01 (1.04)
25	かまってもらいたい	3.51 (0.81)	63	認めてもらいたい	3.00 (1.12)
26	逃げ腰になる	3.48 (1.08)	64	わだかまりをもつ	2.93 (0.92)
27	子どもっぽい	3.48 (0.96)	65	人見知りする	2.86 (1.06)
28	独占欲が強い	3.46 (0.97)	66	気兼ねする	2.73 (0.97)
29	人の悪口を言う	3.45 (1.07)	67	恥ずかしがりやである	2.71 (1.07)
30	受け止めてほしい	3.40 (0.99)	68	周りによく気をつかう	2.69 (1.08)
31	許しを求める	3.39 (0.84)	69	内気である	2.67 (1.07)
32	寂しがりやである	3.39 (1.09)	70	遠慮深い	2.65 (0.98)
33	弱音をはく	3.37 (0.09)	71	引っ込み思案である	2.65 (1.00)
34	やきもちをやく	3.37 (1.03)	72	目立ちたがり	2.56 (1.07)
35	ひがみことがある	3.34 (0.97)	73	控えめである	2.52 (0.93)
36	愚痴をこぼす	3.32 (0.86)	74	おとなしいほうである	2.49 (1.15)
37	いらいらする	3.32 (0.88)	75	物静かである	2.42 (0.96)
38	へつらうことがある	3.29 (1.03)			

「甘え」だと強く思う項目     
  「甘え」だと思ふ項目     
  「甘え」だとの思いが弱い項目  
 (一般成人女子) N=97

目次で今回評定値が3.0以下の「引っ込み思案である」「控えめである」「恥ずかしがりやである」の3項目が含まれている。そして、この「引っ込み思案の甘え」はこれまでの研究において、他の甘え因子と、かなりの程度の相関を示すことが多々見られた。また、YG性格検査や社会的適応性との関係においても、他の甘え因子と同様に否定的な傾向を示す結果となっている。さらに、評価点が最も低い「物静かである」でさえも評価が2.42、つまり、「甘えだとおもう」と「甘えだあまり思わない」の中間に位置していることなどを考えあわせると、われわれがこれまで使用してきた「甘えに関する質問項目」は確かに「甘え」を捉えていたといえることができると言えよう。

また、表1. の平均値は、成人女性の特徴として導か

れた結果であるかも知れないという点を検討するために、大学生女子との比較を行ってみた。これまでに抽出された因子と、それらに含まれる各項目に対する評定値の成人と学生の比較を表2. に示している。

これをみると「許されると思う」以外の項目に有意差が見られず、成人女性と大学生女子の各項目に対する反応がほぼ同じだということがわかる。しかしながら、甘え因子の評価点を高い順番にみても、成人では「責任回避の甘え」「屈折した甘え」「非自立的甘え」「受容・承認を求める甘え」「追従的甘え」「引っ込み思案の甘え」となるのに対して、学生のほうは「責任回避」「非自立」「受容・承認を求める」「屈折した」「追従」「引っ込み思案」となっており、その順番においては、成人は、屈折した態度や行動を、学生に比べてより強く「甘えている」と感じていると言える。これは角度を変えて考えると、学生の場合、青年期の複雑な心境に鑑みて、「屈折する」ことを容認していると言えるのかもしれない。さらに、甘えの平均値としては、成人は学生に比べ「屈折した甘え」「追従的甘え」を、学生は成人に比べ「受容・承認を求める甘え」「非自立的甘え」を甘えとしてより強く位置づけていることから、甘えと感ずる度合いの大きさは、日常生活とのつながりにおいて、自己内の「～あってはいけない」という感情の反映とも受け取れる。いずれ

にしても、成人・学生との微妙な差はあるにしてもわれわれが使用してきた「甘えに関する項目」は、甘えとして受け止められており、妥当であったと結論づけられると考える。

今後甘え項目の普遍性を確認するためには、年齢幅を広げていくことと、男性への回答をもとめることが必要となると考え、さらに研究を重ねていきたい。

## 第2研究 「甘え」の背景にあるもの

先にも述べたように、われわれは「甘え」あるいは「甘える」ということは、複合的に行動や状態が折り重なってはいるものの、その中には信頼関係を基盤とした円滑な人間関係を育む重要な要素が含まれていると考えなが

ら質問項目を作成してきた。しかし、これまで調査を進めた性格検査や自己効力感、社交性、規律遵守性、満足感、向社会性、自己決定力、許容性等の社会的適応性に関して、ほとんどの甘え因子が肯定的な相関関係を示すことがなかった。唯一、「受容・承認をもとめる甘え」に関しては、向社会性と正の相関が見られたことから「受容・承認をもとめる甘え」に項目として含まれる「わかってほしいと思う」「受け入れてほしいと思う」「かまってもらいたい」等という言葉の中には、他者に対して何らかの役に立ちたいという志向が存在しているものと思われる。そこで、今後さらに広義な甘えを考える上で、これまで使用してきた甘え因子の根底にどういう意味合いが含まれているのか、という点を明確にするために、3つの点に着目してみた。

第1は、「達成行動」と「甘え」の関係である。これは、物事に取り組む場合の姿勢との関係を調査するものである。人がある行動に取り組む場合、自ら積極的に計画を立て、実行に移し、その結果得られた事実に対して自己責任を取る者もいれば、積極的に創造したり参画したりはしないが、与えられた事柄に関しては真摯に取り組むという者もいる。このような構えと「甘え」との関係を調査し検討する。

第2に、「統制の所在」(Locus of control) (Rotter, 1966) と「甘え」との関係を見る。

統制の所在とは、自分の周りに起きる事象が、ある程度自分の力で左右できると感じているか、或いは自分の力のとでも及ばないところで決定づけられていると感じているかの違いをみるものである。前者は、「内部統制型」後者は「外部統制型」と呼ばれる。これらは、各人の過去における経験に大きく左右されると思われる。自分がこれまでに成功経験を重ね、有能さを自覚してきた場合、自分自身の力が周りに影響を及ぼすと考えるであろうし、また逆に失敗経験を重ねてきた場合は、自分の周りの出来事は自分の力ではどうしようもないのだという諦めと逃避に走ることが多いであろうと考えられる。これら過去の経験より導かれると思われる「統制の所在」が「甘え」とどのような関係を持っているのかを明らかにしたい。

第3に「欲求不満場面」と「甘え」

との関係について考察する。

欲求不満やストレスを起こす状況において、そのストレスに対してどのように対処するかは人によってそれぞれ異なるであろう。自分の中にそれを押し込める者もいれば、それを上手に昇華するもの、逃避するものあるいは、暴力に走るものもいる。これらのさまざまな対処の仕方と「甘え」との関係を調査し、非社会的あるいは反社会的な対処方法が甘えと関係しているものかどうかについて考えていくこととする。

以下、上記3点について考察する。

【調査手続き】

1. 調査対象  
福岡市内 女子大学生 191名
2. 調査期間

表2. 甘え項目に対する成人と学生の反応比較

		成人平均(SD)	学生平均(SD)	T値	検定
第I因子	引っ込み思案の甘え	14.21 (3.76)	14.54 (3.34)	-.29	N.S.
	引っ込み思案である	2.65 (1.00)	2.83 (1.03)	-.56	N.S.
	控えめである	2.52 (0.92)	2.42 (0.99)	.33	N.S.
	人の陰にかくれる	3.02 (1.11)	3.16 (1.06)	-.41	N.S.
	恥ずかしがりやである	2.71 (1.07)	2.84 (1.07)	-.38	N.S.
	人の後からついていくほうである	3.28 (1.00)	3.33 (1.06)	-.15	N.S.
第II因子	屈折した甘え	17.63 (3.93)	16.96 (3.77)	-.55	N.S.
	よく腹をたてる	3.52 (1.03)	3.18 (1.09)	1.02	N.S.
	すぐ不機嫌になる	3.55 (1.11)	3.69 (1.02)	-.41	N.S.
	いらいらする	3.32 (0.88)	2.94 (1.02)	1.28	N.S.
	周囲に八つあたりすることがある	3.68 (1.21)	3.54 (1.16)	.37	N.S.
ふてくされることがある	3.52 (0.93)	3.66 (0.91)	-.48	N.S.	
第III因子	受容・承認を求める甘え	16.74 (3.62)	17.44 (4.40)	-.55	N.S.
	わかってほしいと思う	3.24 (1.03)	3.28 (1.11)	-.12	N.S.
	受け入れてほしい	3.21 (1.02)	3.39 (1.20)	-.51	N.S.
	かまってもらいたい	3.51 (0.81)	3.83 (1.05)	1.1	N.S.
	寂しがりやである	3.39 (1.09)	3.47 (1.23)	-.22	N.S.
	やきもちをやく	3.37 (0.90)	3.49 (0.97)	-.41	N.S.
第IV因子	責任回避の甘え	18.64 (4.27)	18.50 (4.87)	.09	N.S.
	責任感がない	3.64 (1.29)	3.53 (1.21)	.28	N.S.
	義務をはたさない	3.80 (1.06)	3.58 (1.33)	.58	N.S.
	許されると思う	3.87 (0.96)	4.40 (0.93)	-1.7	+
	責任ある仕事はしたくない	3.64 (1.13)	3.58 (1.23)	.16	N.S.
努力しようとしにくい	3.65 (1.18)	3.77 (1.21)	-.32	N.S.	
第V因子	非自立の甘え	17.03 (3.06)	17.93 (2.79)	-.97	N.S.
	甘さがある	3.62 (0.92)	3.82 (1.03)	-.65	N.S.
	未熟だと感じる	3.03 (1.14)	3.19 (1.28)	-.42	N.S.
	自立していないと感じる	3.91 (1.07)	4.04 (0.91)	-.41	N.S.
	弱音をばく	3.37 (0.90)	3.47 (1.07)	-.32	N.S.
	逃げ腰になる	3.48 (1.08)	3.43 (1.02)	.15	N.S.
第VI因子	追従の甘え	16.14 (3.02)	15.55 (3.06)	.62	N.S.
	へつらうことがある	3.29 (1.03)	3.10 (0.89)	.62	N.S.
	長いものにまかれる	3.27 (0.83)	3.24 (0.92)	.11	N.S.
	小異をすて大同につく	3.25 (0.90)	3.19 (0.90)	.21	N.S.
	人に取り入る	3.19 (1.02)	2.93 (0.96)	.83	N.S.
	人の後からついていく	3.11 (0.94)	3.07 (1.01)	.13	N.S.

N=97 N=108

平成11年6月～7月

### 3. 調査内容

甘え行動に関する項目 (5段階評定) 25問  
 達成行動に関する項目 (5段階評定) 26問  
 統制の所在に関する項目 (5段階評定) 18問  
 欲求不満場面での項目 (5段階評定) 40問

### 〔結果〕

今までわれわれが使用してきた甘え行動に関する質問が「甘え」を捉えらえていたという結果をふまえ、更に、これまでに繰り返し抽出された甘え因子がある程度の高い信頼性を保ったことから、今回の調査においては「引っ込み思案の甘え」「屈折した甘え」「受容・承認を求める甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」の5因子に含まれる25項目のみを採用して検討を行った。これまでの研究における各項目の寄与率、因子の信頼性は、表3.に示すとおりである。

表3. これまで抽出された甘えの因子

	引っ込み思案の甘え	寄与率	信頼性係数
第I因子	B67 引っ込み思案である	.808	$\alpha = .8416$
	B71 控えめである	.776	
	B72 人の陰にかくれる	.694	
	B68 恥ずかしがりやである	.638	
	B75 人の後からついていくほうである	.609	
	屈折した甘え	寄与率	信頼性係数
第II因子	B58 よく腹をたてる	.779	$\alpha = .8075$
	B56 すぐ不機嫌になる	.661	
	B60 いらいらする	.623	
	B57 周囲に八つ当たりすることがある	.594	
	B46 ふてくされることがある	.531	
	受容・承認を求める甘え	寄与率	信頼性係数
第III因子	B47 わかってほしいと思う	.717	$\alpha = .8058$
	B45 受け入れてほしい	.688	
	B48 かまってもらいたい	.657	
	B38 寂しがりやである	.614	
	B37 やきもちをやく	.605	
	責任回避の甘え	寄与率	信頼性係数
第IV因子	B16 責任感がない	.494	$\alpha = .6683$
	B05 義務をはたさない	.467	
	B25 許されると思う	.461	
	B24 責任ある仕事はしたくない	.459	
	B27 努力しようとししない	.455	
	非自立の甘え	寄与率	信頼性係数
第V因子	B08 甘さがある	.557	$\alpha = .7057$
	B03 未熟だと感じる	.531	
	B01 自立していないと感じる	.483	
	B07 弱音をはく	.451	
	B09 逃げ腰になる	.430	

N=619

## 1. 達成行動と甘えについて

### ①達成行動の質問項目

達成行動に関する質問項目の作成に関しては、カリフォルニア人格検査(CPI)の「自立的な成就欲求」すなわち、自立することにより達成可能な場面においてそれを成就するためにどのくらいの関心があるかということ、及び「順応的な成就欲求」すなわち、順応する事によって成就できるような場面でどのような態度を示すかの2種類の質問の中で、具体的に達成行動として理解しやすいものを参考として選び、項目を作成した。最終的に残った26項目にバリマックス回転を施し因子分析を行った結果、固有値が1.0以上であるものをもって4因子が抽出された。

第1因子は、“機会さえあれば私はよい指導者になれると思う”“私は新しいことに挑戦することが好きだ”“未知の計画事に参加するとき心がわくわくする”“探検や冒険をしてみたい”“物事の壁にぶつかった時が自分の力の試しどきだと思う”の5項目を含み、これらを「積極的達成行動」の因子と名付けた。

第2因子は、“私は前もって自分のすることの計画をたてておくのが好きだ”“私は勉強の予定表を作って、その通りにやっていくことが好きだ”の2項目を含みこれを「順応的達成行動」の因子と名付けた。

第3因子は、“誰かに裏切られたら道理を通すために仕返しをするのが当然だと思う”“はじめに計画をたててしまうと、人生の面白みは半減する”“未来になにがおこるかかわからないのだから大事な計画などたてるわけにはいかない”の3項目を含み「達成行動否定」の因子とした。

第4因子には、“私は親や先生のいうことに従順である”のみが採用基準の負荷量0.40以上であり、1項目のみの因子となった。そこで、内容的には同一と言いがたい部分は残るものの、この項目は第2因子の「順応的達成行動」の中に取り入れて以下の調査を進めることとした。また、各因子の寄与率はそれぞれ第1因子27.4%、第2因子20.6%、第3因子12.8%、第4因子10.9%であり第4因子までの累積寄与率は、71.7%となっている。

### ②. 達成行動と甘えの相関関係

達成行動と甘えとの相関関係を表4.に示す。これを見ると「積極的行動」と甘えの関係は何れもマイナスの相関関係である。特に「引っ込み思案の甘え」と高いマイナスの相関を示している ( $r = -.461, P < .001$ )。

つまり、「引っ込み思案の甘え」の強い者は、自立することによって達成できる場面において、あまりそのようなことに関心を持たないということが言えるであろう。これは、達成することに関心を持たないという以前に、自立するということにさえも関心を持ち得ないということも含まれると思われる。また、その他の甘え因子の内、

表4. 「甘え」の5因子と「達成行動」の相関関係

	引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立
積極的行動	-.4612***	-.2242**	-.0727	-.2988***	-.2829***
順応的行動	-.0515	-.1693*	.0442	-.1543*	-.0614
行動否定	.0415	.1740*	.0552	.2934***	.0861

\*\*\* . . . 0.1%、\*\* . . . 1%、\* . . . 5%、N=191

「受容・承認を求める甘え」以外の3つの甘え因子との関係においても数値としては小さいが有意水準に達していることから、同様のことがいえるのではないであろうか。

次に順応的行動と甘えとの関係を見ると、「屈折した甘え」および「責任回避の甘え」との関係において値は小さいがマイナスの相関を示している ( $r = -.169, P < .05, r = -.154, P < .05$ )。これらの甘えは、順応することで成就できるというような場面において積極的に順応しようとしなさいということ、もっと具体的に言えば、計画をたてたり予定表をつくることによりその後の活動が円滑に進むとしても、その手順を踏むことをしないという者達である。その裏側には、粗野性や強情さとともに、順応しなければならぬ事態でのストレスへの耐性のなさが感じられる。

また、最後に達成行動否定と甘えとの関係について見てみると、「屈折した甘え」と「責任回避の甘え」がプラスの相関を示している ( $r = .174, p < .05, r = .293, p < .001$ )。特に「責任回避の甘え」においてその数値が高く、人生における全ての計画ごとに対して“何が起こるか分からないから”や“面白みが半減するから”という言い訳によって行動を起こさないことで自己への負担を逃れているということが伺える。

## 2. 統制の所在と甘えについて

### ①統制の所在の質問項目について

Rotter, J.B. (1966) による統制の所在に関する質問項目、全29問(ただし、各問にA, Bの2種類の質問がある)のうち、ライスケールを除き、さらに戦争や政治に関する問題を省き、なるべく身近なテーマについての質問のみを取り上げ、最終的に18問(内部統制9問, 外部統制9問)を採択した。各質問項目について自分の考えにあてはまる程度を5段階で評定し、各9項目の合計をもって、内部統制得点または外部統制得点とした。

### ②統制の所在と甘えの相関関係

各統制の合計得点と甘えとの相関を表5. に示している。

まず、内部統制得点とはいずれの甘えの相関も有意水準に達しなかった。これに対し、外部統制得点との間には、「引込み思案の甘え」「屈折した甘え」「受容・承認を求める甘え」「責任回避の甘え」「非自立の甘え」のすべてにおいて正の相関がみられた。( $r = .227, P < .01, r = .331, P < .001, r = .263, P < .001, r = .323, P < .001, r = .252, P < .001$ )。

そもそも統制の所在を内部に置くということは、周りに起こる出来事について現実的に捉え、結果が吉でも凶でも自分の考えや行動がそこに影響をおよぼしている、あるいは及ぼし得ると考えるものである。今回の調査で「内部統制」と「甘え」の相関が見られなかった理由を考えると、甘えるということは、良い結果が得られた場合と悪い結果が出てしまった場合のいずれにおいても自分の力が及んでいると考えるとは限らないということではないだろうか。つまり、良い結果においては、自分の努力や能力に起因させ、悪い結果においては、自分のあずかり知らないことだと突き放して捉えることが「甘え」のひとつの特徴であるのかもしれない。その結果、今回の質問のように結果が明確に表現されていない場合には、一貫した回答の方向性がみられなかったと言えよう。この点に関しては、今後、出力された結果と原因をどのように捉えるかという因果律の所在との関連性をみることで、さらに研究していく必要があると思われる。

一方、「外部統制」との間には全ての「甘え」との相関が見られた。このことから、甘えるということは一貫して、周りの変化や結果を“運が悪かった”、“どうしようもないことだ”、“たまたまそうなったのだ”などというように判断し、環境に対する自分自身の影響力を否定することにつながるものと考えられる。その理由は2つの方向から考察される。一つは、自分にかかる責任を他人まかせにすることで、自らの負担を軽減しようとするものであり、もう一つは、過去の失敗経験の積み重ねにより、自分に対する自信の喪失から来る自暴自棄の感情でもある。いずれにしても、「甘え」の強いものは、統

表5. 「甘え」の5因子と「統制の所在」の相関関係

	引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立
内部統制	.0092	-.0799	.1100	-.1134	.1112
外部統制	.2273***	.3306***	.2630***	.3233***	.2525***

\*\*\* . . . 0.1%、\*\* . . . 1%、\* . . . 5%、N=191

制の所在を外部に置くということが見いだされた。

示している。

## 2. 欲求不満場面と甘えについて

### ① 欲求不満場面の質問項目について

欲求不満場面の設定に関しては、PFスタディ（青年用）24場面の中から、他者より何らかの被害を受けて欲求不満状態にある「自我阻害場面」と、自分が他者に害を与えてしまったという良心の呵責により欲求不満に陥る「超自我阻害場面」を、それぞれ2場面ずつ選択した（PFスタディ場面ナンバー3、12の自我阻害場面、2、17の超自我阻害場面）。場面選択にあたっては、身の回りによくありそうな事態で、場面内への自己投入がしやすいものという観点から慎重に採択を考えた。

自我阻害場面の「場面3」は、映画館で、前にすわっている人の帽子が邪魔してスクリーンが見えない場面、「場面12」は、誰かがスカーフを取り違えて帰ってしまったという場面である。また、超自我阻害場面の「場面2」は、友人の家で花瓶を割ってしまった場面、また、「場面17」は、自動車に乗ろうとして鍵を無くしてしまったことに気付いた場面である。

それぞれの場面の中で自分以外のもう一人の登場者が投げかけることばに対してどのように反応するかということ、あらかじめ用意した反応例のそれぞれに5段階で回答を求めた。反応例の作成に際しては、従来のアグレッションの「方向」と「型」を組み合わせたものを平易な表現に置き換えた斉藤勇の、ローゼンツワイクの性格分類（1996）を参考にした。この性格分類を表6. に

表6. ローゼンツワイクの性格分類

		反 応 型		
		障害優位型	自我防衛型	要求固執型
攻撃の方向	外罰方向	①障害強調	④攻撃	⑦解決依存
	内罰方向	②障害合理化	⑤自責	⑧努力
	無罰方向	③障害無視	⑥容認	⑨習慣服従

斉藤勇著「イラストレート心理学入門」より

### ② 欲求不満場面と甘えの相関関係

欲求不満場面と甘えの相関関係を表7-1および、表7-2に示す。

まず、表7-1の自我阻害場面での関係をみると、甘えの種類によって反応がまちまちであることがわかる。正の相関がみられたものは、「引込み思案の甘え」と障害合理化、障害無視（ $r = .247, P < .001, r = .195, P < .01$ ）、「屈折した甘え」と障害強調、攻撃（ $r = .241, P < .001, r = .238, P < .001$ ）、「受容・承認を求める甘え」と解決依存（ $r = .144, P < .05$ ）、「責任回避の甘え」と障害強調、攻撃（ $r = .169, P < .05, r = .173, P < .05$ ）、「非自立の甘え」と障害合理化、障害無視、攻撃、自責（ $r = .168, P < .05, r = .166, P < .05, r = .237, P < .001, r = .140, P < .05$ ）であった。

特に高い値を示したものについて述べると、「障害の強調」つまり、他者から危害をくわえられた時にその事態を引き起こしている事実に対して「困ったわ」「邪魔だわ」ということばを表出し、事態に対する不満を強調するのは「屈折した甘え」の強い者、「障害合理化」つまり、失望や不満を内側に抑えて外に表さず「かえって良かったんです」というように処理してしまうのは「引込み思案の甘え」の強いもの、危害を与えた他者に対して敵意をあらわにし「非常識なひとね」「なんてあわて者なの」というように当事者自身の人格等に攻撃が向けられるのは「屈折した甘え」「非自立の甘え」の強い者、ということが出来る。

他者より何らかの危害が加えられ、ストレスをかけられた場合でも、ストレスラーとしての当時者の立場やその場の状況等を考慮に入れながら、なおかつ自分の正当な主張ができるように自己をコントロールすることは人間関係を円滑に行う上で重要なことだと言える。今回の調査では、甘えの自己制御機能の不完全さが顕著にあらわれたように思う。つまり、甘えが強い場合の対応として、自分の立場のみに注目し不満感情をぶつける、相手をひどく罵倒する、また、それとは正反対に自分の気持

表7-1. 「甘え」の5因子と「自我阻害場面」の相関関係

		引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立
自我阻害場面	障害強調	.1107	.2419***	.0228	.1696*	.1396
	障害合理化	.2479***	.0962	.0403	.1294	.1686*
	障害無視	.1952**	.0690	.0298	.0679	.1669*
	攻撃	.0569	.2385***	.1335	.1734*	.2373***
	自責	.0479	.0151	.1191	-.0272	.1406*
	容認	-.0398	-.0522	.0706	-.0382	.0719
	解決依存	-.1285	.1248	.1447***	-.0230	.1241
	努力	-.1146	.0051	.1281	-.0156	.0876
習慣服従	.1272	-.0080	.1082	.0688	.0308	

\*\*\* . . . 0.1%、\*\* . . . 1%、\* . . . 5%、N=191

表7-2. 「甘え」の5因子と「超自我阻害場面」の相関関係

		引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立
超自我阻害場面	障害強調	-.0130	.0334	-.0437	.0110	-.0204
	障害合理化	.1365	.1206	.0279	.0753	.1535*
	攻撃	.0282	.1443*	.0857	.1118	.1226
	自責	.0156	.1598*	-.0239	.0203	.1793*
	容認	-.0587	.0665	.0552	.0471	.1107
	解決依存	.0216	.0398	.0060	.0296	.1212
	努力	-.0297	.0308	.1444*	-.0076	.0696
	習慣服従	.0912	.0272	.1229	.0177	.1162
	責任否認	-.0157	.1091	.0092	.0124	.0484
	言い訳	.0082	.1287	.0955	.0013	.2304*

\*\*\* . . . 0.1%、\*\* . . . 1%、\* . . . 5%、N=191

ちを極端に押さえ込み、無理な合理化をするというよう  
な態度になってしまうということが実証された。

次に表7-2の超自我阻害場面での欲求不満と甘えとの  
相関係数をみると、「屈折した甘え」と攻撃、自責 ( $r = .144, P < .05, r = .159, P < .05$ )、「受容・承認を求  
める甘え」と努力 ( $r = .144, P < .05$ )、「非自立の甘え」  
と障害合理化、自責、言い訳 ( $r = .153, P < .05, r = .179, P < .05, r = .230, P < .01$ ) となっている。他者に対  
して何らかの損害を与えてしまい、良心の呵責にさいな  
まれているという場合、「引込み思案の甘え」「責任回  
避の甘え」の中には特徴的な反応は見られない。「屈折  
した甘え」には、「自分はやっていない」と言って返っ  
て他者を攻撃する反応と、「どうせわたしが悪いのだ」  
というように自分を攻める反応の相反する事態が存在し  
ている。これは、自分が過失を犯してしまったことに対  
して、悪いことをしたといういわゆる超自我を無視する  
ことはできないが、かといって、自我の強さから相手の  
非難を素直には聞き入れられないという葛藤から、両極  
端な態度に出してしまう傾向にあるということが言えよう。

「受容・承認を求める甘え」の場合には、自分の過失  
に対して、「弁償します」「もう一度探します」というよ  
うに、問題を解決するために自らが努力しようという姿  
勢がある。これは、社会適応上必要なことではあるが、  
その罪償感情が過剰になると、他者に負担をかけること  
にもなりかねない。

一方「非自立の甘え」は、3種類の対処パターンとの  
相関がみられ、第1には「こまったわ」「おかしいな」  
というように、自分の過失だと考えてはいるが事態のみ  
に気持ちが向いているもの、第2に「自分が悪かった」  
というように反省と自責が混ざったもの、第3に「つい  
手がすべって」「ついぼんやりして」というように自分  
の過失を素直に認めているが言い訳をして自分をどこか  
正当化しようとするものである。「非自立の甘え」に、  
3種類の対応パターンと相関が認められることから、  
自分が不測の事態を招いた時に、どの様に対処してよい  
のかわからずに、当惑する可能性が大きいということが

言えるのかもしれない

以上、3つの要素と甘えの関係をみてきたが、これま  
で、抽出されてきた「甘え」は、甘えの中の臨床的な部  
分を捉えていると言うことができるのではないだろうか。  
勿論これらの甘えを軽減する方法を考え、社会適応や社  
会成熟度を高めていくことは重要なことである。しかし、  
一方において、我々が当初より考えていたように、人間  
関係を円滑に営むために必要な「甘え」というものに関  
しても、更に「甘え」の領域を広げながら考えてみたい。

そこで、最後にこれまで抽出された甘え因子と人間関  
係の最も基礎となる「信頼関係」との関係性について考  
えることにする。

### Ⅲ. 「信頼関係」と「甘え」について

#### ①信頼関係に関する質問

今回「信頼関係」に関する質問として、1998年に作成  
した社会的適応項目の中から、「自己効力感」「社交性」  
「自己決定力」「満足感」を取り出し、さらに、具体的  
な両親や友人に関する質問をプラスした15項目に対して  
因子分析を施した。その結果、「仕事は人よりうまくで  
きる」「だれとでも仲良くできる」「人から相談されるこ  
とが多い」「新しい環境にもすぐなれる」「自分の意志で  
動く」「グループの意見をまとめることができる」「人と  
広く付き合うことができる」の7項目を含む第1因子と  
「心からうちとけて話し合える友達がいる」「心から心  
配してくれる人がいる」「両親はいつも自分を見守って  
いる」の3項目を含む第2因子が抽出された。第1因子  
を「自己信頼」、第2因子を「他者信頼」と命名した。

#### ①「信頼関係」と「甘え」の相関関係

「信頼関係」と「甘え」の相関関係を表8. に示してい  
る。まず、「自己信頼」と甘えとの関係を見てみよう。「引  
込み思案の甘え」「屈折した甘え」「責任回避の甘え」  
「非自立の甘え」との間に負の相関が見られた ( $r =$   
 $-.484, P < .001, r = -.166, P < .05, r = -.185, P$

表 8. 「甘え」の 5 因子と「信頼関係」の相関関係

	引込み思案	屈折した	受容承認	責任回避	非自立
自己信頼	-.4846***	-.1662	.0740	-.1850*	-.1837*
他者信頼	-.0370	-.0505	.1829*	-.0768	.0470

\*\*\*・・・0.1%、\*\*・・・1%、\*・・・5%、N=191

<.05,  $r = -.183$ ,  $P < .05$ )。しかし、「受容・承認を求める甘え」については、有意な相関はみられなかったものの、その値は他の甘えとは異なり、正の方向であった。さらに「他者信頼」との間には有意な正の相関が見られた ( $r = .182$ ,  $P < .05$ )。このことは、“わかってほしい”“受け入れてほしい”というような態度や行動はマイナス面にだけ影響するものではないということである。そういう態度・行動をとる背景には、自分のまわりの人達の存在を十分に意識しながら生活しているということであり、他者がもっている、自分に対する好意を感じ取りながら他者に信頼を寄せるという相互作用が、円滑な人間関係を育むということに繋がると考えることができる。われわれは今後、この「受容・承認を求める甘え」に注目しながら、成熟した「甘え」や文化としての「甘え」、「甘え」の性差等々についてさらに調査を進めながら甘えの功罪について考えていきたい。

【参考文献】

土居健郎『「甘え」の構造』弘文社 1971  
 土居健郎『「甘え」推敲』弘文堂 1975  
 E. L. デシ著 安藤延男・石田梅男訳『「内発的動機づけ—実験社会的アプローチ」』誠信書房1980  
 土居健郎『「甘え」の周辺』弘文堂 1987  
 我妻 洋『CPI日本版実施手引き』誠信書房 1989  
 ソール・ローゼンツァイク著 林 勝造他訳  
 『「PFスタディ解説」』三京房 1987  
 Rotter, J. B.  
 『Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement』  
 Psychological Monographs, 1966. 80 ( I )  
 加藤諦三『甘えの心理』大和出版 1994  
 中山 治『甘えの精神病理』洋泉社 1996  
 斉藤 勇『イラストレート心理学入門』誠信書房 1996  
 篠原しのぶ『日本および中国における青年男女の「甘え」に関する調査研究 I 福岡女学院大学紀要 7号1997  
 篠原しのぶ・原崎聖子『「青年の甘えと社会適応に関する調査研究」』福岡女学院大学 人文学研究紀要 人文学研究 第2輯 1999  
 北山 修他『「日本語臨床3 「甘え」について考える」』星和書店 1999